

目的・方法は第1報に同じ。第3報では健康状態と食生活・食意識との関係を検討した。

結果 1 食嗜好： 身体的徴症候を多く持つ者は、インスタント食品、ファーストフード、清涼飲料水を摂取する割合が高く、調理済食品を買う、外食や出前が多い傾向がみられた。徴症候が少ない者に、夕食後の間食はしない、よくかんで食べる、多種類の食品を食べるようにしているという意識をもつ者の割合が高かった。食べ物80品目について、食べられない数が多い者は、男子よりも女子の方が高率であり、食べられない率が高かった物は野菜ジュース、レバー料理などであった。食べ物80品目の嗜好と徴症候との関係は認められなかった。2 食意識： 自分の体型を太めであると答えた者は、男子9.1%、女子17.6%であり、肉類、揚げ物、清涼飲料水の摂取割合が低く、夕食後の間食をしないようにしている率が高かった。食事制限をしている者は、男子12.2%、女子31.5%であり、年齢による差はみられなかった。食事制限の経験のある者は、欠食をした者50.9%、野菜や果物のみ食する者50.4%、油の制限をする者43.3%であった。3 家族： 家族と共に朝食をとらない者が57.1%、夕食では18.3%であった。食事は一人で食べてもおいしいと答えた者が55.1%あり、徴症候を多く持つ者には、一人で食べてもおいしいと答える率が高かった。祖父母との同居割合が高いE中学校では、K中学校よりも家族との共食回数が多く、朝食に米飯を食べることが多い、朝食の欠食が少ない、健康であると意識する者が多い傾向がみられた。高校では、祖父母との同居割合による影響はほとんどみられなかった。従って食生活に及ぼす家族の影響は高校生よりも中学生において大きいと考えられた。